軍都の形成
～『柏市史　近代編』から見た軍都の成り立ち～

日本大学　学生会員　○横関　俊也
日本大学　　正会員　　伊東　孝

１　はじめに

第２次世界大戦前、東京の周辺には軍事施設の密集する「軍都」が数多く形成された。その中には、横須賀・相模原・立川・習志野・柏と、現在では東京近郊の衛星都市として重要な位置にあるものが少なくない。それらの都市の発展過程は、戦後における日本の都市形成の傾向を考える上で大変重要である。

そこで本研究では、旧軍都の形成過程を探るための基礎的研究として、戦前から著しい発展を遂げた千葉県柏市をとりあげ、軍事施設の役割と位置の把握と、軍隊と都市計画の関係について、『柏市史　近代編』を参考に整理分析した。

２　柏の軍関係施設

戦前の柏はひなびた田舎町であり、県内の他の地域と比べても発展が著しく遅れていた。昭和10年の人口は、２万人を少し超えた位であった。当時、陸軍が新しい飛行場用地を探していることを聞いた町の有力者は、町の振興策として軍隊の受け入れを積極的に進めた。終戦時において柏に駐屯していた部隊を表－１に、軍事施設の位置を図－１に示した。

（１）柏飛行場

松戸・成増・調布などとともに帝都防空の飛行場として昭和13年に陸軍が設置した。面積は145万m^{2}で、1,500 mの滑走路が１本あり、アメリカ爆撃機などとの防空戦闘に備える前線基地であった。終戦時には第10飛行師団の飛行第18戦隊の一部（本隊はフィリピン）と飛行第70戦隊、第３飛行大隊が配備されていた。また飛行機の整備などをするため、陸軍航空工廠立川支廠柏分廠が隣接して設置されていた。

（２）秋水基地

柏飛行場にはドイツ空軍が開発したロケット戦闘機メッサーシュミットMe163Bをモデルに開発した戦闘機秋水が配備されていた。同機は実験段階のもので、実戦に用いられたという記録は残っていないが、飛行場から東に約５kmほどいったところに燃料貯蔵庫などの施設が建設されていた。

表－１　終戦時柏に駐屯していた部隊

所属軍	所属師団	所属連隊、大隊
第36軍	直轄	迫撃砲第23大隊
	直轄	独立工兵隊第101大隊
	第201師団	迫撃第21連隊
	第93師団	師団司令部他
第51軍	直轄	独立工兵隊第91大隊
第52軍	近衛第3師団	近衛工兵隊第3連隊
	近衛第3師団	衛生隊
	第234師団	歩兵第322連隊
	第234師団	歩兵第323連隊
	第234師団	工兵隊
航空総軍	第10飛行師団	第4航空教育隊
	第10飛行師団	飛行第70戦隊
	第10飛行師団	第3飛行場大隊
東京師管区		第22特設警備工兵隊
		歩兵第2補充隊
		工兵補充隊
		第160独立警備隊
その他		柏憲兵分遣隊
		柏陸軍病院

出典：『柏市史 近代編』p.800より抜粋

図－１　柏における軍事施設の位置

出典：参考文献２）、４）より作成

キーワード　都市史　基地　首都圏　関東
連絡先　〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1　TEL 047-469-5572　FAX 047-469-2251

（３）航空教育隊

昭和15年２月、柏飛行場の南に第４航空教育隊が転営してきた。昭和18年には約3,000人の兵員が配属されていたという。

（４）高射砲連隊

高射砲は敵航空機を地上から砲撃する兵器である。同県内の市川にあった部隊が、昭和12年11月に柏に移動したのが始まり。B29の飛行高度が10,000ｍなのに対して、高射砲の射程は8,000ｍであり、あまり効果はなかったという。

（５）柏憲兵隊分遣所

柏への部隊進出が決定すると、それに先駆けて軍隊における警察の役割を担う憲兵隊の分遣所が柏町内に設置された。昭和15年には新庁舎が竣工した。

（６）柏陸軍病院

昭和14年４月に開設される。付近では最新の設備が整っており、慰問も頻繁に行われた。

（７）第93師団司令部

第93師団は、日本軍が本土決戦に備えて金沢から移駐させた部隊である。当時の日本軍部隊の中では圧倒的な火力を保持しており、最強部隊とよばれていた。日本軍は、アメリカ軍が九十九里から上陸すると想定しており、第93師団は千葉県内でそれを迎え撃つ計画だったという。終戦間際の昭和20年に、東亜専門学校（現麗澤大学）内に司令部が設置された。

（８）軍需工場

柏には、日立製作所・東京機器工業・日本工学工業などの軍需工場が進出した。しかし実際に操業を始めたのは、終戦間際の昭和18年で、町の発展にはあまり寄与しなかったという。

（９）その他の施設

柏市内には、このほかにも陸軍演習場、射撃場、気象台工場といった施設が設置されていたのが確認されている。

３　軍隊と都市計画

柏では、軍事施設の建設が始まった昭和12年頃から地元商工会を中心に、都市計画を策定しようという動きがあらわれた。翌13年の１月には都市計画法にもとづいた田園都市計画の認可を内務省に申請した。この計画の概要は、柏駅を中心とした半径約２㎞のエリアに幅員約11ｍの放射状道路を６本建設し、住宅地・工場地帯・田園地帯の区分けを行ったうえで、将来的には周辺各村を合併して、人口３万人の田園都市を建設しようというものだった。しかし申請は一度却下され、対象範囲を現在の我孫子・沼南まで拡大したものを、翌年１月に提出してようやく認可された。この２案の大きな違いはその指定範囲にあるが、他にも、設置する幹線道路を６本から３本に変更するなどしている。

このような都市計画が必要になった背景には、軍事施設の進出や東京のベッドタウン化により、住宅の需要が急速に伸びていたことがある。しかし行政側では、都市計画を制定したが、戦時体制に突入していたため予算の目処が立たず、計画はほとんど実行できずにいた。一方、軍人や工場勤務者の住宅は、戦時体制の整備のためにも早急に整備する必要があった。そこで、民間有力者の出資による「振興会社」を設立、町の代行機関として住宅地開発を行わせることになった。

４　軍事施設の跡地

戦後柏飛行場は、通信基地として占領軍により接収されたが昭和54年に返還され、県立柏の葉公園として市民の憩いの場になっている。その他の施設跡地は、食糧の増産を目的に開墾され、今では工場・住宅団地・官公庁舎が立地し、柏の成長の原動力となった。柏陸軍病院は、国立柏病院を経て、現在では市立柏病院となっている。

５　まとめ

今回の研究では、柏における軍事施設の役割と位置を調べたうえで、軍隊と都市計画の関係について整理した。柏では、終戦時の市域における兵員数が１万人を超えていたと考えられており、これは人口の三分の一以上を軍人が占めていることを示している。この他にも、大都市から疎開してきた人々がいたことを考えると、軍隊を誘致してから10年も経たないうちに急激な人口増加に見舞われたいうことになる。事実、昭和15年の人口が約22,000人に対して昭和22年には約35,000人に急増している。このような状況に加え、戦時体制であったため、都市計画を進行させることができなかったと考えられる。

参考文献

１）柏市教育委員会：『柏市史 近代編』、平成12年３月
２）柏市教育委員会：『平和への願い』、昭和61年８月
３）上山和雄：『帝都と軍隊』、日本経済評論社、平成14年１月
４）柏市史編さん委員会：『歴史アルバム かしわ －明治から昭和－』、昭和59年１月